



日本図書館研究会学校図書館史研究グループ 編著 ;
塩見昇 語り手『塩見昇の学校図書館論：インタ
ビューと論考』

大崎, 裕子

(Citation)

研究論叢, 30:123-124

(Issue Date)

2024-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491468>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491468>



6. 図 書 紹 介

日本図書館研究会学校図書館史研究グループ
編著；塩見昇 語り手
『塩見昇の学校図書館論：インタビューと論考』

大崎 裕子（関東学院大学）

本書は、教育と学校図書館との関係を追究し続けてきた図書館学者である塩見昇氏の学校図書館論の成り立ちや特徴を探ることを目的に立ち上げられた学校図書館史研究グループによって編まれ刊行された。同グループは、氏の傘寿を機に「多くの著書、論文、講演録がある氏ではあるが、何故今の学校図書館論に到達したのかなど、著作には書かれていないことをいろいろ聞きたい」との思いを抱いた8名によって発足したという。8名それぞれが学校司書の経験などを有しておられ、立場の違いはあれ、皆、氏から学校図書館論を学んできた方々である。インタビューは2018（平成30）年12月から足掛け5年、計14回にもわたって行われ、その内容が本書第Ⅰ部としてまとめられている。それを受け第Ⅱ部で氏の論の特徴を4つの章に分けて「論考・塩見昇の学校図書館論研究」として8名による考察がまとめられているというのが本書の構成である。各章の構成を紹介しておこう。

はじめに

第Ⅰ部：インタビュー

- 第1章 学びの時代 1937～1960
- 第2章 大阪市立図書館員の時代 1960～1971
- 第3章 大阪教育大学での仕事
- 第4章 学校図書館の発見
- 第5章 学校図書館職員論

- 第6章 学校図書館の教育力
- 第7章 学校図書館における「図書館の自由」

第Ⅱ部：論考・塩見昇の学校図書館論研究

- 第1章 塩見昇の学校図書館論を考える
- 第2章 学校図書館活動論
- 第3章 学校図書館職員論
- 第4章 『市民の学校図書館づくり運動』と塩見昇

資料1 昭和52年度「学校図書館学」講義概要

資料2 塩見昇 学校図書館関連を主とする年譜

インタビューを受けて—謝意と期待の一端を—（塩見昇）

あとがきにかえて

新緑の頃を想起させるような若草色と萌黄色の表紙のデザインには、氏の学生時代のノートが使われており、几帳面な手書きの文字が読みとれる。400頁にも及ぶ圧巻のインタビュー記録を読み進めながら、この表紙を眺め当時に思いを馳せてみる。氏の人生における様々な出来事、出会い、経験が幾重にも積み重なりながら、日本の学校図書館学の第一人者として名高い氏が歩んできた長い思索の一端を感じることができ、感銘を受ける。インタビューからは、氏の論の土壌になった事象や考えが浮かび上がってくるのである。例えば、氏の学校図書館論の特徴のひとつに、法的根拠のない戦前の教育実践の中から学校図書館について追究している点が挙げられる。日本の学校図書館は戦後1953（昭和28）年交付の学校図書館法をもってはじめて成立した

とみなす学校図書館論とは一線を画しているのである。なぜこのような論を展開するにいたったのか、インタビュアーは丁寧に氏の思考・活動・経験を尋ねていく。それにより、氏が「自分の学校図書館論を持ちたい」と試行錯誤する過程で、戦前の教育実践に出会い、法的根拠をもたない時代においても日本で学校図書館の萌芽があったことを発見し、教育を変える学校図書館の可能性を見出していったことが詳細に語られていくのである。そしてそれは、氏が大学教員として教員養成に関わる中で「教師を目指す学生に学校図書館の意義なり必要性をどう意識してもらうかであり、そのためにはまずはそのことを自分にどう納得させるか」という切実な課題意識から深められていったものであることも明かされているのである。

本書には「学校図書館とは何か、なぜ学校図書館が必要なのか」という根源的な問いをひたむきに追究し続けてきた一人の研究者、そして教育者の生きざまが紡がれているのである。本書を通じて我々は、塩見氏のライフヒストリーを知ると同時に、よりよい子どもの学びとは何か、人がよりよく生きるとはどのようなことかということを考えるヒントをいくつも得ることができる。

本書の最後「インタビューを受けて」の中で、学校図書館の現状を「なお道半ば」「なお道遠し」と氏は表現されている。今後「学校の中の図書館」が本当の意味で「教育を変える学校図書館」になっていくために、より実証的・実践的に深められていくことへの期待が氏より寄せられている。この期待に応え、氏の論を実践につないでいきたいと挑み続けておられるのが学校図書館史研究グループの面々である。「道遠し」と知りながら、本書の刊行によって、氏の学校図書館論を実践へとつなぐための大きな第一歩を踏み出してくださった同グループに対し、深く敬意を表した

い。研究者のみならず、実践家、学生、市民、多くの方に手に取っていただきたい1冊である。

（日本図書館研究会刊 2023年5月発行
本体価格2,700円＋税）